傷

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
傷

【Ｎコード】
Ｎ１３５８Ｏ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
惹かれ合う奈々と転校生秀典。だが奈々には誰にも言えない秘密があった。それは。優しい心を扱った恋愛ものです。

第一章

傷

柊奈々は髪の毛を首が覆うまでに伸ばしている。奇麗な黒髪だ。やや切れ長の少しだけカマボコを思わせる目は少し上につっているが優しい感じのするいい目である。口元も優しげでいつも微笑んでいる感じだ。背はあまり高くないがスタイルはよく特にスカートから見えている素足とその胸が男子生徒の人気の的だ。

しかしである。何処か近寄り難い印象があってだ。美人だというのに彼氏はいなかった。

「御前声かけないのか？」

「御前もか？」

男子生徒達はお互いに言い合う。

「何で告白しないんだよ」

「タイプなんだろ？御前のよ」

「何かな」

タイプと言われた彼がだ。困った顔で首を捻りながら言うのだった。

「近寄りにくいんだよな、あの娘」

「ああ、そうだよな」

「それはな」

周りの面々も彼のその言葉に頷いた。

「そうした感じするよな」

「話しにくいっていうかな」

「近寄り難いよな」

「性格もいいんだけれどな」

真面目で一生懸命な性格でも有名だった。しかも謙虚で物静かだ。一人でいることが多いがそれでも誰からも嫌われてはいない女の子だ。

だがそれでもだ。何処か近寄り難くだ。それで誰も声をかけていなかった。
「一気に勇気出して告白するか？」
「それができればいいんだけれどな」
「しにくいよな」
「ああ、声かけにくいんだよ」
それで奈々は結果として一人でいることが多いのだった。しかしここでだ。
転校生が来た。背が高く目は鋭い。奥二重の切れ長の目だ。眉は薄い。髪は茶色でありさらりとしたそれを丁寧に左右に分けている。額は上手に隠している。細面であり身体つきもすらりとしている。その彼が転校してきたのだ。
「矢車秀典」
彼はこう名乗った。
「宜しく」
「ってかなりイケメンじゃねえかよ」
「何だよ、いきなり女の子の注目の的か？」
男連中は彼を見てまずはやっかんだのだった。
「あれだけ顔がよかったらな」
「しかも声も低くて渋いしな」
「俺達から見ても認めるしかないしな」
「ああ、えらいのが来たな」
その彼が来たのである。そして予想通り女の子達の注目の的になった。忽ちのうちにであった。ボクシング部に入るとであった。そこに女の子達がわんさと寄ってきた。
「ちょっと、顔殴らないでよ！」
「顔殴ったら駄目よ！」
皆でスパーリングをしている彼の相手に言うのだった。だがその秀典の動きがだ。
フットワークも拳も速い。まさに蝶の様に舞い蜂の様に刺すであ

った。マイク＝タイソンの様にすり足を使わないしフォアマンの様に振り回さない。古典的ではあるがモハメド＝アリのボクシングスタイルだった。それで闘っていた。
しかも強い。明らかに何かが違っていた。素早くそして威力もある。そんな彼だった。
顔がよくてしかも強い。女の子の注目を浴びる要素に満ちていた。周りには常に彼氏のいない女の子達が群がっていた。だが彼は彼女達には目もくれなかった。
むしろ男達と一緒にいることを好んだ。最初は彼のあまりものもて具合に嫌悪を示していた彼等だが実際に話してみるとだ。悪い奴ではなかった。
「へえ、そうなのか」
「それでここに来たのか」
「ああ、親父の転勤でな」
学校の屋上で話す。牛乳を飲みながらだ。それぞれベンチに座ったりその辺りに座ったりフェンスにもたれたりしてだ。そのうえで話していた。
秀典はフェンスにもたれかかっている。そうして彼等と話していた。
「それでここにだ」
「元々はここじゃなかったのか」
「地元じゃないんだな」
「そうだ。しかしここはいい場所だな」
笑っての言葉だった。笑顔も爽やかで実にいい。
「阪神ファンが多くてな」
「おっ、阪神ファンか」
「そうだったのか」
「ああ、生まれは東京だけれどな」
それでもだというのだ。

第二章

「野球は阪神だ」
「だよな。やっぱり野球は阪神だよ」
「そこしかないな」
「あと趣味はボクシングとギターだ」
「おっ、御前もギターやるのか」
「あれ好きなのか」
「姉ちゃん達に教えてもらってな」
何気に自分の家族関係も話す。
「二人がかりで教えてもらった」
「姉ちゃん二人もいるのか」
「大変だな」
「末っ子なんだよ。それでいつもいじめられててな」
「おいおい、ボクシングしててもかよ」
「いじめられるのかよ」
彼等は次第に打ち解けていった。何時しか彼は男連中と完全に仲間になっていた。そしてだ。その仲間達からある日奈々の話を聞くのだった。
「へえ、そうなのか」
「ああ、そうなんだよ」
「それがな」
今日は教室で話をしている。秀典の机でポーカーをしながらだ。そのうえで話をしているのである。
「困ったことにな」
「折角の美人なのにな」
「何かあったのか」
秀典はふとこう言うのだった。
「それだと」

「かもな。近寄りにくいんだよな」
「どうしてもな」
仲間達はカードを選びながらそれぞれ話す。それと同時に表情を出すまいと必死になっている。ポーカーで表情を出すことは禁物だ。
それは秀典も同じだが彼の表情は動かない。その中でのやり取りだ。
そこでだ。彼は言うのだった。
「とりあえずそういう娘はそっとしておいた方がいいな」
「ああ、そうだな」
「何があるかわからないからな」
「人の傷口に触れるものじゃない」
黒い詰襟の学生服で言う言葉は何故か異常に大人びていた。
「そっとしておくのもいいことだ」
「けれどそれを見たらどうするんだよ」
「その時はよ」
「なあ、そうなったらどうするかだよな」
仲間達はここでこんな話をした。
「その時はな」
「どうするんだ？」
「その時によるな」
静かに答えた秀典だった。
「その時次第だな」
「その時次第かよ」
「人それぞれだしおまけに時と場合がある」
これが彼の考えだった。
「だからな。それはな」
「つまり臨機応変か」
「そういうことか」
「ボクシングにしてもだ」
今度は自分がしているそのボクシングの話もするのだった。

「その都度闘い方を変えないと勝てる勝負も勝てない」
「おっ、出たなボクシング」
「それか」
「そうだ、それだ」
まさにそれだというのである。
「だからだ」
「何か結構クレバーなんだな」
「そうだよな」
皆このことにも気付いた。
「しかし矢車の言う通りだな」
「ああ、ここはな」
「じっくり見て臨機応変だな」
こうして秀典は今は奈々を見ているだけだった。しかしこの話から彼女を意識するようにはなった。そんなある日の雨のことだった。
部活が終わるとだ。雨だった。
部室を出てその雨を見て。秀典は表情を変えずに言った。
「傘を持って来てよかったな」
「ああ、鞄の中か」
「そこにあるんだな」
「そうだ」
同じ学年のボクシング部員達にも答える。部室の前の彼の追っかけの女の子達も今は少ない。残っているのは僅かな数だけである。見れば誰もが傘を持っている。

第三章

「矢車君傘持ってるんだ」
「そうよね、がっかり」
「折角あいあい傘のチャンスだったのに」
それぞれ手に色とりどりの傘を持っての言葉である。
「全くね。折角だったのにね」
「傘持ってるんだ」
「折り畳みよね」
「そうだ」
返答はいつも通りクールなものであった。
「だから。今は安心してくれ」
「何だ、詰まらないの」
「それじゃあ。どうする？」
「帰る？」
秀典の話を聞いてからだ。女の子達は自分達の話をするのだった。
「用事ないしね」
「そうよね、だったらね」
「もうこれでね」
こう言ってであった。しかしであった。何故か誰も帰ろうとしない。
そうしてだ。こう言ってきたのである。
「それでも。一緒に帰らない？」
「折角だし」
「雨だから傘持ってない娘は仕方なく帰ったけれど」
それでいつもより数は少ないのだという。そういう理由だった。
「それでどう？」
「皆で帰ろう」
「そうしない？」

「どうする？」
秀典は彼女達の言葉を受けてそのうえで仲間達に声をかけた。そのうえでだった。
「一緒に帰ろうか」
「あれっ、俺達もか」
「俺達もいいのか？」
「えっ、あんた達も一緒なの」
「そうなの」
部員達だけでなく女の子達も驚きを隠せなかった。
「何か凄い数になるけれど」
「そうなるの」
「それは駄目か」
ここでまた女の子達に問う秀典だった。
「皆で帰るのか」
「どうする？」
「他の面々はどうでもいいんだけれどね」
「そうよね」
その部員達のことを意識することなく話す彼女達だった。部員達もそれぞれ考える顔で話していく。
「俺達って特にいらないよな」
「だよな。矢車だけいればな」
「別にいいんじゃね？」
自分達はいらないのではという。しかしであった。
「いや、皆で帰ろう」
秀典はこう言うのだった。
「皆でだ。そうしよう」
「それは何でなんだ？」
「どうしてなの？」
部員達も女の子達も彼に問う。誰もが怪訝な顔になっている。
「どうして皆で？」

「それは」
「皆でいるとそれだけで楽しい」
こう答えるのだった。
「だからだ」
「だからって」
「そういう理由なの」
「それでいいか」
また一同に問うのだった。
「皆で」
「そうか。それなら」
「矢車君が言うのならね」
部員達はそれで納得した。女の子達は秀典の言うことなら、とそれで頷いた。こうして皆で帰るのだった。
その途中の本屋の前を通ったところでだ。秀典はその中をふと見た。するとそこに奈々がいた。彼女は相変わらず一人でいてだ。そのうえで本を探していた。
それを見てだ。少しだけ考える目になった。しかし今は皆と一緒に帰ってだ。そうして帰るのだった。
そのまた別の日だ。また雨だった。彼はこの時は一人だった。一人で学校の委員の用事をしていた。彼は美化委員になっていたのである。
その美化委員としての仕事を校舎でしていた。その時に雨の中から校舎に戻って来た奈々を見た。彼女はすぐに校舎の中に入った。

第四章

秀典はその彼女のところに来てだ。そうして声を掛けるのだった。
「おい」
「あれっ、貴方は確か」
「矢車だ」
自分から名乗るのだった。
「矢車秀典だ」
「確か転校生でボクシング部の」
「名前は知っていたか」
「はい、有名ですから」
だからだと答えるのだった。
「それで」
「そうだったのか」
「それでどうしてここに」
「委員の仕事だ」
実際に今その手には箒がある。それで委員全員で大掃除をしていたのだ。
「それでだ」
「それでなんですか」
「しかし君は一体どうして」
「私は」
「濡れている。そのままでは風邪をひくぞ」
そしてこう彼女に告げた。
それからだ。自分の詰襟を脱いで彼女のその肩の上に被せたのである。
「まずはそれを着てだ」
「あの、これは」
「風邪を引いたら何にもならない」

奈々に多くを言わせることはなかった。先に言ったのである。
「だからだ。まずはそれを羽織ってだ」
「はい」
「何処か暖かい部屋に行くといい」
こう彼女に告げたのである。
「そこで服を乾かすんだな。その間その制服は貸す」
「そうしてくれるんですか」
「そうするといい。じゃあな」
「はい、有り難うございます」
丁寧にお辞儀をして応える奈々だった。
「それじゃあ」
「部屋は。そうだな」
秀典は部屋についても言った。
「保健室がいいな」
「あそこですか」
「保健の先生は女の人だし乾かす暖房もある」
「だからですか」
「そこでならすぐに乾く。行くといい」
「有り難うございます。それでは」
こうして奈々は秀典が言うままに保健室に向かった。秀典はそのまま仕事に戻った。そしてそれが終わってからだ。彼は制服を受け取りに保健室に向かった。
まずは扉をノックした。そうして入ろうとする。しかしだった。返事がない。まずはそれをいぶかしんだ。
しかし扉は開いていた。それで中に入るとだ。
まずは誰もいなかった。ただストーブのすぐ傍に彼のその詰襟の制服がかけられていた。その暖かさで乾かしているのは明らかだった。
だが他にはかけられている服はない。彼はそれをいぶかしく思った。

保健室の中には先生の机とそのストーブ、そしてカーテンがある。カーテンの中にはベッドがある。だが今はいる筈の奈々の姿はなかった。
探すがやはりそこにはいない。だがベッドの中からだった。
「矢車君ですか？」
「そうだ」
カーテンの向こうからの声に応えた。
「俺だが」
「お仕事終わったんですね」
「それで制服を受け取りに来たが」
「わかりました。それならですね」
「ストーブの傍にあるな」
「はい、それです」
その制服こそがというのである。
「それです」
「受け取っていいか」
「少し待って下さい」
しかしであった。ここで奈々の声はこう言ってきたのである。
「少しだけ」
「どうした？」
「あの」
ベッドから起き上がる声がした。声と共にだ。
そうしてである。暫くしてカーテンが開いて彼女が出て来た。もう既に制服を着ている。どうやら既に乾かしていてそれを着ているようだ。

第五章

そのうえで秀典の制服を自分の手で受けてそのうえで彼に手渡したのだ。かなり律儀であった。
その律儀に受け取ってからだ。また言ってきた奈々だった。
「有り難うございました」
「ああ」
「おかげで助かりました」
「こうした時はお互い様だからな」
こう返す秀典だった。
「気にすることはない」
「そうですか」
「ああ。しかし」
「しかし？」
「何かあったのか」
最初ノックして声をかけてもだ。返答がなかったのでそれが気になったのだ。
「どうしていたのだ、それで」
「服を着ていました」
「服をか」
「はい、それでなんです」
また言う奈々だった。
「お待たせして申し訳ありません」
「それならいい」
「そうですか」
ここで奈々の顔を見るとだ。何故か焦った感じだ。何か絶対に人前では服を着ないといけないといったようなだ。そうした顔であった。
秀典はそれに気付いた。しかしそれはあえて聞かずにだ。奈々の

手から制服を受け取ってそのうえでこの日は別れた。しかしまた別の日にだ。
衣替えが済んだある日のことだ。その日もまた雨だった。今度は学校の帰りに皆と別れて自分の家の最寄の駅から家まで歩いて帰る時だった。その駅で帰るのは彼だけだったのだ。だがその最後の帰り道で不意に土砂降りになったのである。
それで急いでとりあえず歩道橋の下に入った。そこにだ。
何と奈々も入って来た。これは思わぬ再会だった。
奈々の方もだ。彼の顔を見てだ。目を丸くさせて驚いた顔になった。その顔で彼に言ってきた。
「まさかお家は」
「もうすぐだ」
「そうだったんですか」
それを聞いて納得した顔になる奈々だった。
「それで」
「そっちもだったのか」
「はい、この街の生まれで」
そうだったというのだ。
「もうすぐに家だったんですけれど」
「しかしここでか」
「ええ、雨に遭って」
こう話していくのだった。
「それで」
「何か雨の日に合うことが多いな」
「そうですね」
秀典の今の言葉にそのまま頷いた。
「これも縁ですね」
「そうだな。あの時も」
「あの時は有り難うございます」
保健室に入った時の話である。

「おかげで助かりました」
「気にしなくていい。だが今は」
「今は」
「生憎だが制服はない」
衣替えの結果だ。秀典は今は白いブラウスだ。それがかなり濡れて透けてさえいる。髪も完全に濡れ雫が滴り落ちている。そして奈々もそれは同じだった。
その彼女のだ。濡れてしまったせいで透けてしまっているブラウスの左肩のところにだ。彼は見てしまったのである。それをだ。
何かケロイドになっている感じだった。それを見てしまった。そして奈々もだ。彼の視線に気付いてしまったのだ。
咄嗟にその左肩を隠す。しかしであった。もう既に見られてしまった。手遅れだった。
それで言葉を自然に出してきていた。それは言い繕いのものだった。
「これは」
秀典は問わない。自分から話してしまっている。
「小学校の時に」
「何かあったのか」
「家でやかんを沸かしていて。それを誤って零してしまって」
「沸騰した湯をかかってしまったのか」
「はい、それでなんです」
事故によってというのだ。それで火傷を負ってしまったというのだ。

第六章

「背中にまであります」
「随分酷い火傷だったんだな」
「こんなの。誰にも見せられません」
そしてこうもいうのだった。
「とても」
実際に隠そうと必死になっている。それがよくわかるものだった。
だが言葉は自然に出てしまっている。止められなくなっていた。
「それで。ずっと」
「隠していたのか」
「はい」
秀典の言葉にこくりと頷いた。しかしその動作は弱々しい。
「そうでした。誰にも気付かれないようにして」
「着替えの時もか」
「常に上に着ていました」
そうしていたというのだ。
「水泳は休んで。修学旅行の時は誰もいない時間にお風呂に入って」
「それで誰にも気付かれないようにして」
「今までそうしていました」
また秀典に話した。
「けれど今は」
言葉を続けてきた。
「まさか。こんな場所で」
「見られたのが嫌か」
秀典はその彼女に問うた。ここでだ。
「それが嫌か」
「嫌でない筈がありません」
これは奈々の返答だった。唇を噛み今にも泣きそうな顔になって

いる。そのうえでの言葉だ。
「こんな傷。誰にも」
「傷は受けた」
秀典もそれは言った。
「だが」
「だが？」
「その傷は身体にだけ受けたものじゃないな」
こう言ってきたのである。
「そうだな」
「身体にだけ」
「心にもだな」
「心にも」
「そうでなければ隠したりはしない」
秀典は言った。
「絶対にだ」
「それがわかるんですか」
「昔こんなことがあった」
秀典はふと上を見上げた。そのうえでの言葉だ。
「俺の知っている奴の話だ」
「はい」
「そいつは馬鹿だった。自分が死んでもどうということはないと思っていた」
「どうともですか」
「姉が二人いた。いつもその姉ちゃん達が大嫌いだった」
姉の話もここで出したのだった。
「いつも自分のことをあれこれ言う姉ちゃん達が死ぬ程嫌いだった。実際に死んでしまえばいいとさえ思っていた」
「そうだったんですね」
「それで邪険にしていた。そんな中でだ」
ここでだ。話が変わった。

「そうだ、それである日車にはねられた」
所謂交通事故である。それに遭ったというのだ。

第七章

そしてだ。話をさらに続けるのだった。
「その時。気付いたら病院の病室だった。その枕元には二人がいた」
「御二人がなのですね」
「今にも泣きそうな顔でだ。そいつが目を開いたのを見て笑顔になった」
「それってまさか」
「そいつは自分を愛してくれる人にも心配してくれていることにも気付かなかった。そのことを今でも悔やんでいる」
「心にですか」
「傷だな」
秀典は上を向いたままだ。そのうえで言うのだった。
「これも」
「そうですね、確かに」
「このことは誰にも言えない。誰にもな」
ここまで話した。そして奈々に顔を向けてだ。
「誰にでもそういうものはある」
「けれどその人は」
「今は何とか前向きにやっていけているかも知れない」
言葉は一応、とした感じだった。だが言ったことは確かだった。
「傷を受けてもだ」
「傷を受けてもだ」
「じゃあ私は」
「難しいし言えない。隠していてもいい」
それはいいというのだ。傷をわかっているからこその言葉だった。
「だが」
「だが、ですね」
「誰でもそうだったりする。そして傷について何か言われたら」

「言われたら」
「俺でいいか」
奈々に真剣に顔を向けた。そのうえでの言葉だった。
「その時は任せてくれ。何とかする」
「それはどうしてですか？」
奈々には今の秀典の言葉の意味がわからなかった。それで目をしばたかせて問うたのだ。
「どうして。任せてくれと」
「見たからだ」
だからだというのだ。
「傷を見たからだ。見ればそれを何とかすることが信念だ」
こう話してそのうえで見ていた。奈々の目をだ。彼女の目を見ながらの言葉だ。秀典のその鋭い筈の光は今は優しいものだった。
「俺のだ」
「その言葉は」
「信じても信じなくてもいい」
それもいいのだという。
「ただ」
「ただ？」
「俺はそうする。それだけだ」
こう言ってだった。丁度雨が止んだのでその場を去った。後に残った奈々はだ。俯いて考える顔になっていた。しかしであった。次の日にであった。
秀典達がクラスで皆で話をしているとだった。そこにだ。
奈々が来た。おどおどとしている。しかしそれでも何とか言った。
「あの」
「あれ、柊さん」
「どうしたの？」
「何のお話をされてるんですか？」
こう皆に問うのだった。

「よかったら。お聞かせさせてもらえませんか」
「柊さんが来るなんて」
「嘘みたい」
「いいんじゃないか」
だがここでだ。秀典が言ってみせたのだ。
「誰でも来ればいい。そして皆で楽しくやればいい」
「そうだよな、確かにな」
「メンバーは多い方が楽しいし」
皆も秀典が言うとだった。すぐに頷いた。
そうして奈々に顔を向けてだ。あらためて言うのだった。
「それじゃあ柊さんさ」
「ちょっと来て」
「はい」
「皆色々とある」
秀典は奈々が皆の中に入ったのを見ながらまた述べた。
「しかし。楽しくやればいい」
微笑んでの言葉だった。その中で奈々と目が合った。お互いに微笑みを向け合ってだ。そのうえで輪の中に入ったのだった。勇気を少しだけ出して。

傷　完

２０１０・５・８

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1358o/

傷

2010年10月8日12時12分発行